

白杖の先秋雨の地を探る

長谷川柊香 宮城県

白杖で地面に触れるのは移動のためだが、とんとんと音を立てながら歩く姿はたしかに地面を探っているようでもある。今いる「秋雨」の地のときも雪の積もったときも桜が散るときも、地面を探りながら歩く。私たちも歩くためには地球に触れるのだけれど、より深く感じ取る心がある。知るために必要なのは触れる面積の広さではないのだろう。

梨を切る一週間で

藤ほたる 神奈川県

一週間でひとつの円として私たちは何周も回りつつ生活をするが、その円の中のひとつの点として梨を食べた主体。果実に刃を入れることは、果実として完成されていた状態を崩すこと。ひとつの円として完成されていた一週間にも、その果汁は滴り落ちる。一点の崩壊は次の崩壊を呼んでしまう。しみだした場所がふやけて千切れないように。

初しぐれ長居の客のごとく生き

田崎森太 東京都

長居の客はあまり歓迎されるものではない。帰ってほしそうにしても、笑いでごまかしながらまた次の話題へ移られた日には心の中でため息をこぼしてしまふ。主体もこの世に疎まれるような感覚で笑ってごまかしながら生きていく。泣くよりも笑ってしまふ方が心は孤独の中に閉じ込められる。

君のまなざしにふれて

ブランコをする私の身体は

きちんと私を訪ねてくれる

こはくいろ

大阪府

「君」に見つめられることで髪の毛や手や肩、身体のすみずみまで意識が行き渡る。まなざしによって心が先に変化し、あとから身体が追いつく様を身体が「訪ねてく」と描く上手さ。ブランコを漕ぐときの一瞬停止するような浮遊感を思い出し、読者の共感もぐっと強まる。

割らないで中身は恥ずかしい胡桃

藤 雪陽 長野県

下句の言葉の取り合わせが分からない。分からないのだけど分かる・惹かれる作品は、書き手の心を過不足なく言葉が覆っているから。本当の胡桃に恥ずかしいも何もないけれども、もしかしたら主体と同じように胡桃も「中身」を見られるのは恥ずかしいのかもしれない。初句の始まりにより一層「中身」への想像が膨らむ。

抽象画にされてメロンソーダに陽

玻璃 愛媛県

何者によって「抽象画にされ」たのか。輪郭も心も滲み何もかもが曖昧にしか存在できなくなつた空間でも、メロンソーダは絶対にそれとわかるはず。陽を浴びてより鮮やかに発光するように在るメロンソーダの緑色から、再び輪郭を取り戻したい。

枝豆の

匂いがして、

畦道に

仄赤く灯る

魂売り場

真島しましま 千葉県

道中どこからともなく「枝豆の匂い」がすることはなぜか稀にある。どこからしているのかいつも分からないけれど、異界の空気の匂いなのかもしれない。枝豆に似た、何か分からないものの匂い。「魂売り場」が当たり前にある異界に、気付かぬうちに入り込んでしまったような恐ろしさがある。

白いワイシャツにしがみつく

アブラムシと私

つけ麺 千葉県

「白いワイシャツ」を着ているのは「私」で、おそらく強風を受けているところなのだろう。所有しているという感覚は驕りである。「私」も「アブラムシ」もこの世から振り落とされないよう必死でワイシャツにしがみついている。語順によって質量も大きさも変化させることができる、言葉の面白さを見た。

前世から月を見ている

土田 真央 滋賀県

私たちは今世での月の記憶しかないけれど、今立ち止まり見上げているのと同じように、違う場所で、違う体で月を見てきた記憶が魂に刻まれている。肉体の死生は区切りとはならないことが、「見ている」の現在進行形によって描かれる。闇に月の光を見上げてきたすべての生物の希望を思う。

いちじくをくださいお礼は忘れま

すあなたが僕を思い出すから

手塚桃伊 東京都

いちじくも「あなた」の記憶も求める。心が手に入らないならせめて一時の思考だけでも自分を侵食させたい。しかし思い出す際はよい感情ではないだろうことをしている。お礼をしないのではなく、「忘れます」など、控え目なようにで強烈なエゴが見え隠れしていて面白い。「僕」のために存在する「あなた」であってほしい。